



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2012.3.1発行 NO.23

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言 「ワークシート」第1号は夏を目標に

「ニューズレター」No.22 (2012年1月)の「巻頭言」で、本研究企画委員会が取り組む新年度のアクションの1つとして、園内研修の話題を提供する「ワークシート」を年3回位のペースでお届けすることを紹介しましたが、この「ワークシート」について、もう少し説明したいと思います。

ワークというと、学校で慣れ親しんできた練習問題が経験としてあるので、練習問題用紙を連想してしまうかもしれません。なので、仕事をするとか作業をする意味の“ワーキング”をするためのシート＝ワーキング・シートというほうが、イメージに近いかもしれません。シートとしたのは、「ブック」となると薄い物でも100ページ近くになり、そうなるとなかなか手がつけられないのではないかと。けれど、12ページ程度のシート感覚なら、少し始めてみようと思えるのかな…と考えたものです。シートも続けていけたら、テーマごとに章立てされた加除式の1冊のブックになることを思い描いています。

ところで私たちは、大豆生田啓友先生をリーダーにした研究チームに「保育の質を高めるための体制と研修に関する研究」をお願いし、2011年5月にその報告書をまとめてもらい、皆様にもお届けをしました。その巻頭に、前委員長の遠山洋一先生が、こんなことを書かれています。私たちが「ワークシート」を通して皆さんと一緒に考えたいことはこういうこと、と思い、改めて紹介します。

〈保育所保育指針などでも「保育の質」ということが大きく採りあげられるようになりました。それは、乳幼児期の保育・養育の質がその後の人生における人の資質やあり方に大きな影響をもたらすことが、ようやく理解されはじめてきたことの表れと考えてよいでしょう。別の見方をすれば、ともすると受け入れ児童数やサービスの多様さやコストにのみ社会的政治的関心が向きがちなことへの警鐘でもあります。ともあれ、

私たちは「良質の保育」を実現する責務があります。

しかしながら、「保育の質」をどういうものとして考えるか、「保育の質」を高めるためにどうしたらよいかについて、広く共通理解ができているとは残念ながらいえません。…中略…

いきなり「保育士の研修カリキュラムをつくる」ということではなく、「保育の質とは何か」の基本のところに戻って考察し、そこから「保育の質を高める」ための手がかりを掴んでいきたいということです（太字筆者）。

ここでは、研究報告書の巻頭の挨拶ということから、「保育士の研修カリキュラム」と書かれています。が、「ワークシート」で皆さんと一緒に考えたいのは、「園内研修」はどうあったらいいのかとか、こうすべきだということをここで提案するのではなく、シートに書かれたことを話題にしながら、保育の原点に立ち返ってみんなで話し合ってみようということです。

このシートでは、実際の保育の場面を事例として、できる限り紹介しようと思っています。そしてそこから、子どものこと、保育のこと、保育者のこと、あるいは保護者とのこと等々を、職場の同僚と一緒に語り合い、分かち合ってみることで、「保育の質とはこういうことではないか」ということを、みんなで探り出していけたらと思うのです。

本研究企画委員会では、保育の実践を高めるためのもう1つの試みとして、2008年7月に、『保育園における「子どもの育ちと学び合い」への招き』をワークブックⅠとして刊行しました。

このワークブックでは、ニュージーランド（以下、NZ）が国をあげて、子どもを理解するための手立てとして開発した「ラーニング・ストーリー＝子どもたちが関心を示したり学んでいる姿を、(学びは周りの人々、場所や物との応答的關係を通して達成されるものであり、周囲の文脈から切り離された知識やスキル

の習得ではないとして)“学びを物語”として記録し(“学びの物語”)、その記録を頼りに同僚とみんなで語り合い・分かち合うことで子ども理解を深め、そこから次への手立てを見出していく(NZでは、このことを評価と考えている)方法」を紹介しました。今日でも、NZでは、子どもを理解する力を高めるための具体的実践を『事例集』として出し続けています。

私たちがここから学ぶことは、優れた実践モデルに数多く出会い、実践をイメージしながら、同僚との語り合い・分かち合い、あるいは保育園どうしの実践交流を通して、共有し合うプロセスが、保育者を育て、保育の質を高めていくことにつながっていくのではないかと思います。

(鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長)



幼保合同研究チームの今とこれから

「新システム」論議が始まって間もなくの頃でした。旧知の間柄である全日私幼・研究機構副理事長の安家周一氏と、「幼保合同で“こども指針”を現場主導でつくれるのか」と話していました。2010年の初夏のこと、まだ3つのWTは組織されていませんでした。

「幼稚園教育要領」も告示化されて間もない、「保育所保育指針」も保育現場では「建学の精神」「民間の独自性」の名の下にうまく機能しない状況をどのように感じ、受けとめればよいだろうか?現場主導で「こども指針」をつくりだすことによって、このような指針論議を止揚する好機になると考えました。

早速、全私保連の研究企画委員会に諮り、2010年9月、東京・市ヶ谷の私学会館で第1回の合同研究会が開催されました。その後、概ね月1回ペースで開かれ、会場は全国保育会館と私学会館を交互に使用しています。

★“なかよし”になることから

当初は、お互いに多少顔見知りのメンバーがいても、幼と保が向き合って着席すると、相手の立場を尊重しようと努め、控えめな提言になったり、自分の保育観や園の取り組みを語り合う、エピソード交換会のような状態でスタートしました。しかし、回を重ねるたびにフランクな雰囲気が醸成されてゆき、「本音」がちらりちらりと表出しだしました。最も驚いたのは、「保育園は長時間保育をすすんで実施して、補助金を得たいと考えている」という「生の声」を、本研究会の幼稚園側の委員からも、また、全日私幼研究機構主催の第1回幼児教育実践学会(2010年8月21日~22日)においても耳にしたことです。

「合同研究の方向性」については、幼保の歴史的背

景というより業界の慣習の違い、幼保の生活形態が異なるため、あるいは双方の研究機構がそれぞれ取り組んできたテーマの違いもあって、多種多様な見解が散らばって、指針づくりのイメージが混じり合わないもどかしさがありました。ただ、幼保一体という大義とともに、“なかよし”になって“気心が知れた”ことが、今後も継続し、発展させようとする気持ちを支えているように思います。

★異なる園生活の形態があっても

幼稚園の場合、乳児保育がなく、多くの場合、年齢別に複数のクラスが存在し、1クラス20名~35名の子どもたちを「1クラスずつ仕切られた保育室で、1人の担任が保育する日常」があります。

「保育時間は短かく、担任保育者は、すべての子どもが登園する時から降園時まで一緒に過ごす」。このような生活形態の中では、自ずと「年齢別保育とクラス活動中心」、および「担任中心の意図性のある保育」を前提に、子どもと保育が語られます。

私自身は、長年、数多くの幼稚園の園内研修にかかわってきました。午前中、テーマのある一斉保育を実際に見て、そこでの「よりよい展開の仕方」や「保育者のかかわり方」について、午後から検討会をするという内容でした。

しかし、私たちは今、「保育の質そのものを探るための園内研修」を提案しています(鈴木委員長の「巻頭言」を参照)。幼稚園界では文科省の指導の下、「評価」が義務づけられ、その評価のあり方について模索しています。このような新たな状況(「評価」と「園内研修」)に対する「拠り所」になるような「こども指針」が待望されていると思います。そして、より一層重要

なのは、“どのような内容の指針をつくるか”という内容論以上に、“どのような過程を経てつくるのか”という過程重視の発想が必要で、それがなければ保育現場には根づかないと確信します。

まさにこれは、わが国の国家としての気質（慣習）の問題だといえます。「保育指針」のような大切なものは役人と一部の有識者で作成して、現場に“伝達”するのが常套手段だと考えているうちは、「指針」に魂は宿らないでしょう。国が発想転換をして、ゆっくり時間をかけて、せめて都道府県単位でボトムアップ論議

を積みあげてつくりあげる仕組みづくりを期待します。

そういう意味では、幼保合同研究チームも、現在10数名だけのメンバーだけが東京に集って「指針」についてあれこれ議論している現状を進展させないとダメでしょう。全国の会員が少しでも主体的に指針づくりに参画できるような運動を展開し、新たな“仕組みづくり”を画すること、これこそが、まさに幼保の有志が発足当初に描いた“現場主導の形”である、と思います。

(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

論考

「ミラーニューロン」と「心の理論」 …乳児の成長における「自己と他者」を考える視点

人は、どのようにして自己自身の心にアクセスし、他者の心を読み取り、社会的コミュニケーションを行うのかということは、心理学の難問でした。その研究の1つが、「心の理論」と呼ばれているものです。これは、心理学でいうところの、「相手の心の中を推察する」「他者が自分とは異なる意識を持つと考えることができる」能力のことです。いわゆる、他者の心を推測・想定する能力です。

このような心の中での動きについての研究は、科学というよりも、「心の哲学」と呼ばれる分野で研究されてきました。それは、他人からは見えない心の動きを、行動として見える物理的なものと関係づけて研究する学問です。

その「心の理論」の研究で、1996年に発見された「ミラーニューロン」の存在が、重要な切り口として研究され始めています。

昨年7月、子安増生・大平英樹・編著『ミラーニューロンと〈心の理論〉』（新曜社）という本が出版されました。この本の「まえがき」には、「哲学の基本問題でもある“自己と他者”が科学的研究の対象になったのは、近年の認知心理学と脳科学の発展によるところが大きい。人間の言語と行動は、いつの時代にも、“自己と他者”を考えるうえでの重要な手がかりであったが、近年の脳科学の発展により、さまざまなレベルで重要な知見が得られるようになった」と書かれてあります。

ここにあるように、今、「自己と他者」について論ずる際の2つの重要かつ代表的な視点として、「ミラー

ニューロン」と「心の理論」が取りあげられているのです。

最近、私が「ミラーニューロン」の存在を職員に話したために、乳児を保育しながらその存在らしきものを発見するようです。

先日も、1歳児の子どもどうしがふざけあっていて、片方の子が頭を机にぶつけたとたん、もう片方の子が「いたっ!」と、相手がぶつけた頭のあたりを抑えたそうです。かつて、自分が頭をぶつけた時に痛かった部分を、相手がぶつけたのを見ただけで自分の脳の中に写し取って、反応したということでしょう。

こんなことを繰り返していくうちに、他人の行動を、自分の中での体験の1つとして脳が動くわけですから、他人と一緒に遊ぶことは、ある意味で、倍の体験をしていることになるのかもしれませんが。

J・ピアジェ（スイスの心理学者）は、年少の子どもたちが、自己中心的な思考をしていると考えました。あらゆることを自分に引きつけて考えてしまうために、聞き手や他者の立場から物事を見ることができないということです。そして、この自己中心的な思考は、おおむね7歳頃から始まる具体的操作期段階まで続くとされました。しかし、どうもピアジェが考えたよりも、子どもたちは有能な存在なようです。それ以上に、乳児においても、認知において、他人の存在は大きいような気がしています。

先日、職員から見せてもらった動画には、1歳半くらいの赤ちゃんが、数か月くらい月齢の高い子がマッ

トの上で飛び跳ねて転ぶのを見て、キャッキヤと笑っている姿がありました。笑われた子は、もっと笑わせようと、何度でも転んで見せます。それが5分以上続きました。すでに、1歳児から一緒に遊んで楽しんでいるようです。

これは、大人があやしている時と同じ反応なのか、また、物が転がった時に面白がることと同じ反応なのかよくわかりませんが、少なくとも、何度も転んで見せた子のほうは、見ている子を意識しています。この場合、相手が大人の場合は、転んだのを見て面白がるかもしれませんが、こんなに何度も心から喜ぶことはしないでしょう。そういう意味では、子どもどうしのかかわりが重要であることは確かです。

.....●.....●.....●.....

このような事例が、園では0歳児クラスの中でよく見られます。だからといって、乳児は、いつも他児と楽しそうに遊ぶだけでなく、同じくらい意地悪もしま

す。たとえば、ある子が遊んでいるおもちゃを取りあげてしまったり、突然、顔をつかんだり、たたいたりします。

しかし、私から見ると、その行為は攻撃的なものではない気がします。乳児は、他の子をひっかくから、即「ひっかき!」と思ってしまいますが、乳児においては、自分と他人を意識する行動であり、相手の顔や手足を確かめているような行為に見えます。物に触って、そのものを確かめるように他人の顔をつかむのです。ですから、「なでる」というよりは、「つかむ」というような動作になるのです。

そこで、大人から見ると、危険な行為に見えてしまい、赤ちゃんどうしを近くに居させないか、大人だけが相手をしてしまうのです。しかし、嫌がる他の子の存在、嫌がられる体験、また、やられる体験も、今後社会の中で生きていくうえでは必要な気がします。

(藤森平司●東京・新宿せいが保育園園長)

編集後記

◎怪獣たちの居るところ

子どもの何気ない振る舞いも、よく観察してその意味を深く考えていくと人間社会のあり方に踏み込まざるをえなくなります。藤森代表の、「自己と他者」「ミラーニューロン」「心の理論」と「1歳児クラスの子どもの姿」から、乳児が成長する仕組みを改めて認識することができました。

少なくとも100年くらい前は、生活の中で無自覚に認められ、発揮されていた能力だと思います。今も全国の1歳児クラスの保育室で散見できる姿です。多くの保育者がその姿に笑みを浮かべたり感激していると思われますが、保育現場にはその能力を保ち育む実践を阻む怪獣が棲みついています。文明社会に蔓延し肥大化する「安心・安全第一の思考パターン」です。

保育者にとっては厄介な“他者”でしょう。親の切実な気持ちに寄り添うために、噛みつき防止策として子どもどうしを隔離したり、オモシロイDVDを長時間視聴させる保育が行われたり、安全という観点で自然物に触れさせない配慮がなされたり、除菌剤や清浄機に汚染された保育室環境が優秀と評価されたり、家庭においても同じように、「安心・安全」を経験する乳幼児はたくさんいます。

保育者としての“自己”が、社会という“他者”とコミュニケーションするために、『園内研修』が必要だと考えます。「噛みつき」をはじめ、「その子どもの行動や振る舞い」の意味を学びや育ちの姿として園内で分かち合う『園内研修』は、怪獣退治の手立てとしても、すべての保育施設において『必置条件』にすべし!という願いを込めて、「ワークシート」(鈴木委員長の「巻頭言」を参照)の製作に取り組んでいます。積極的に活用していただける“きっかけ”も、併せて生みだしたいと思います。

また、幼保一体化という新たな制度の中で、保育園と幼稚園はこれまでの他者意識の関係から“自己と他者”の関係がもう始まっています。“自己”と“他者”がどのような関係を築くのか、まずは地域で相互理解が必要だと思います。「100年後の日本の姿」という大義に立った“自己”が、幼保の歴史や制度が異なる“他者”と向き合って折り合う闘いです。

子どもの生きる力は、「自己主張と他者理解」「コミュニケーション能力の育成」「問題解決力」等々で表現されますが、大人社会では生き様やポリシーが問われます。権威や潮流に迎合し、今日の利害を計算し「事なかれ」に傾くのも生きる術です。

“自己と他者”の関係性は、古い慣習に染まった“自己”と大義や公正を志向する新しい“自己”との格闘でもある、そんなとらえ方も必要ではないかと思われます。

(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

❖問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp